

P-177 原発性肺癌骨転移におけるI型コラーゲン代謝マーカー(ICTP, PINP)の有用性についての検討

三重大学第三内科¹,

○小林 哲¹, 田口 修¹, 油田尚総¹, 安井浩樹¹
畑地 治¹, 吉田正道¹, 小林裕康¹, EC.Gabazza¹
足立幸彦¹

【目的】I型コラーゲン代謝マーカーであるICTPおよびPINPが肺癌の骨転移評価に有用かどうか評価する。

【対象と方法】コントロール18例, 肺癌59例

(adc 24, epi 21, small cell 14), 良性肺疾患11例 (IPF 6, TB 2, CVD-IP 2, DPB 1)。測定はRIA。

【結果】組織型によらず両者とも有意に肺癌において高く (PINP : p=0.04, ICTP : p=0.001), ステージの進行する程高値であった。転移部位では両者とも骨転移に関し高く, PINPにより顕著で, 特異度が高かった。ICTPは組織特異性のある既存の腫瘍マーカーに関連した。

【結論】ICTP, PINPともに肺癌の骨転移評価に有用である。

P-179 肺癌におけるSecretory leukoprotease inhibitor (SLPI)産生の検討

福井医科大学第三内科

○鉛嶋慎吾, 出村芳樹, 中西正教, 塩崎晃平, 戸谷嘉孝, 佐々木文彦, 石崎武志, 宮森勇

【目的】Secretory leukoprotease inhibitor (SLPI)は気道に特異的なprotease inhibitorとして知られているが, 我々は血清SLPI値が炎症性肺疾患のみならず, 肺癌においても高値を示すことを報告してきた。今回, 肺癌組織からのSLPI産生の可能性について検討した。

【方法】1) 肺癌患者60例 (肺炎合併例やCRP高値例は除外)の血清を用い, EIAキット (帝人)にてSLPI値を測定し健常者と比較すると同時に, 組織型や進行度による検討, 治療 (手術)前後の検討, さらに予後との関連性について検討した。2) 生検や手術材料から得られた肺癌組織のホルマリン固定パラフィン包埋切片を用い, ABC法にてSLPIの免疫染色を行った。

【結果】非小細胞肺癌患者のSLPI値は健常者と比較して有意に高値を示し, 特に進行癌でより高値であった。手術可能例では, 術後SLPI値は下降した。一方, 小細胞肺癌 (肺炎非合併例)では, 健常者と差はなかった。さらに, 免疫染色では小細胞肺癌以外の組織型で陽性所見が得られた。

【総括】SLPIは, 非小細胞肺癌細胞自体からも産生されている可能性がある。

P-178 肺癌骨転移における骨代謝マーカーの有用性の検討

鳥取大学第二外科

○中村広繁, 谷口雄司, 目次裕之, 伊藤則正, 前田啓之, 田中宜之, 石黒清介, 応儀成二

【目的】骨代謝マーカーの中で骨吸収を反映するcross-linked carboxyterminal telopeptide of type I collagen (ICTP)と骨形成を反映するcarboxyterminal propeptide of type I procollagen (PICP)の肺癌の骨転移診断及び治療経過における有用性を検討すること。

【対象と方法】肺癌の術前患者及び術後再発患者23例について骨シンチ, 骨Xp, MRIで骨転移を検索すると同時に, 血中の骨代謝マーカーであるICTP, PICPとALP及び腫瘍マーカーを測定してその有用性を検討した。

【結果】骨転移10症例では骨転移のない13症例と比較して有意にICTP, ALPの高値, PICP/ICTP比の低値を示したが, PICPは有意差を認めなかった。経過中に骨転移が出現した症例が7例あり, これらの症例では全例で骨転移後にICTP, PICP/ICTP比が前値より上昇した。骨転移に対して放射線療法, 化学療法を施行した1症例では治療による骨シンチや骨痛の経過とICTP, PICP/ICTPがよく相関した。また, 骨転移に対してbisphosphonate製剤を使用した4症例では骨痛は軽減できたが, ICTPの上昇, PICP/ICTP比の低下は抑制できなかった。

【結語】肺癌の骨転移は溶骨性であり, ICTPとPICP/ICTP比は骨転移の診断のみならず, 治療経過における病勢を判定できる有用なマーカーと考えられる。

P-180 原発性肺癌患者の肺癌診断における喀痰中CYFRA21-1測定の有用性に関する検討

藤田保健衛生大学第2教育病院呼吸器内科

○宮崎淳一, 立川壮一, 堀口高彦, 笠原純一,
近藤りえ子, 志賀 守, 杉山昌裕, 今津守隆,
佐々木 靖, 出口隆司, 照屋林成
総合成田記念病院呼吸器内科
半田美鈴, 棟方英次, 廣瀬正裕

【目的】原発性肺癌患者の喀痰中CYFRA21-1を測定し, 肺癌診断における有用性を検討した。
【対象と方法】1997年11月以降当院及び関連施設に入院した56から83歳の原発性肺癌患者10名および良性肺疾患患者5名を対象とした。内訳は男性10名, 女性5名, 肺癌の組織別では腺癌4名, 扁平上皮癌6名であった。誘発痰を採取し喀痰中CYFRA21-1, CEAを測定した。同時に血液を採取し血中CYFRA21-1, CEAを測定した。喀痰の誘発には高張食塩水誘発法を用い, 3~5%食塩水を10分間ずつ濃度を上げながら計30分間吸入し喀痰を誘発, 採取した。CYFRA21-1はEIA法, CEAはRIA法で測定した。

【結果】喀痰中CYFRA21-1は肺癌患者で 83.5 ± 34.1 と高値を示す傾向を認めた。現在症例数を増やし検討中である。